

2016 年度前期「政治過程論」講評

2016 年度前期「政治過程論」の採点、終了しましたので、例によって講評を行います。今年度の問題は、以下の通り。

以下のいずれか一問に答えなさい。両方に答えてもかまいませんが、できのよい方を採点対象にしますので、合わせ技の得点は期待できません。時間資源の集中をとるか危険分散をとるか、戦略は受験者にお任せします。

1. ダール (Robert A. Dahl) の「ポリアーキー (*Polyarchy*)」について、この語の意味および、なぜこの語を使うのかについて触れ、その議論を説明せよ。

2. 「民主主義を機能させる (*Making Democracy Work*)」ためには社会的な紐帯を強化することが必要だという議論が最近よくなされる (英語で示されているのは、パットナムの『哲学する民主主義』の原題である)。「コミュニティの復権」などの文脈で語られたりもする。しかしこれはわれわれが「近代市民社会」に関して「『である』ことと『する』こと (丸山眞男)」や「『共同社会』と『利益社会』 (F. Tönnies; *Gemeinschaft und Gesellschaft*)」等を通じて学んできたことの否定であるかのようにも思える。どう理解すればよいのか、説明せよ。

明らかに難易度の差のある出題なので、あまり二問目への解答は期待できそうにないと思っていましたが、予想以上で、2 問目への解答者は 1 名のみでした。2 問目は見ての通り、多様な解答が可能だと思いますので、論点の理解についてよほどの疑義がない限り OK とするつもりでしたが、1 枚のみの答案もそうひどくはなかったので、チャレンジ精神をよしとしてこれには A を与えました。

ほぼ全員が答えてくれた一問目ですが、問題文の中に解答のポイントが示してある、これ以上はないというぐらいの簡単な問題であったと思うのですが、あまり成績がよかったとは言いかねます。まず分布から。

2 回生 A+ : 1 名、A : 15 名、B : 54 名、C : 23 名、F : 8 名 計 101 名

3 回生 A+ : 2 名、A : 9 名、B : 40 名、C : 20 名、F : 0 名 計 71 名

4・5 回生 A+ : 1 名、A : 9 名、B : 28 名、C : 3 名、F : 0 名 計 41 名

2 回生の A の中に一問目に答えたただ一人が含まれていますので、1 問目の統計としては、A は 14 名です。

さて、1問目については、①「ポリアーキー」という言葉自体の意味、②ダールがなぜわざわざこの新しい語を作らねばならないと考えたか、③ポリアーキー概念によって論じられた事柄の説明、という三点がポイントで、それぞれにきちんと答えれば簡単にAのとれる問題でした。

「ポリアーキー(polyarchy)」は「モナキー(monarchy：独裁)」や「オリガーキー(oligarchy：寡頭制)」との対比を行えば明らかですが、多数支配、多頭制などと訳されています。この辺りの語を出してくれれば①のポイントはクリアされたこととなります。問題文を読んでないのか、この語の意味自体を答えてくれない答案を多く見ました。答えようとして「多元主義」を挙げたものも散見されました。確かにダールは多元主義者ではありますが、ポリアーキーの意味としては正しくはありません。

ダールの関心は民主主義(特に自由民主主義)の政治体制の分析にありましたので、これらの語を使えばいいのに、わざわざそれを避けて造語を用意してまで分析に臨んだのはなぜなのかを答えてほしいというのが②のポイントです。民主主義という語はあまり価値中立的でなく、発生時(ギリシア時代)には悪しきものにとらえられ、その後、近代以降は良きものとして語られるなどしており、現代に入っては人民民主主義諸国など自由を圧迫している体制も民主主義を自ら名乗るなどしていて、この語は多義的であり論争的であることは明らかです。価値中立的・客観的に分析に臨もうとすると、この語を使ったのでは多義的過ぎて困ること、多様な価値への傾きを呼び起こしすぎて困ること、そうしたことに思いをいたすからこそ、メルクマールを明瞭にして、新しい言葉を作ったということなのです。

このポイントが最も答えられていないところで、政治学の講義をきちんと聴いていないということだと思いますが、デモクラシーは理想の姿でどこにもないため、少し劣る現実の不完全な民主主義を指す語としてポリアーキーを使った、という噴飯物の答えが多くありました。確かに、これに近い言い回しをダール自身も行っているのですが、その真意は、理念型としての「民主主義」には多様な価値が内在しているので、そうした価値をすべて実現することは現実にはあり得ず、現実に存在する政治体制を分析するには二つのメルクマールに収斂させて体制分析を行わねば価値中立的・客観的ではあり得ない、というのがダールの立場なのです。

ポリアーキー概念を使って論じられた事柄の説明は比較的簡単だったと思います。政治体制を二つのメルクマール(公的・政治的異議申し立ての自由度と政治参加の包括性)により分析し、二点とも高いものをポリアーキーとし、自由主義的ではある(異議申し立てができる)が民主的とは言いがたい(多くの人々に参加が認められてはいない)体制、民主的ではあるが(多くの人々の参加が見ら

れる)自由主義的とはいいがたい(異なる政治的意見を封殺している)体制、自由主義的でも民主的でもない体制、を合わせ、4つの体制の類型を作りました。これについては、ま、ポリアーキーを論じよと言われればこれになりますので、多くの人できていました。③のポイントが最もクリアしやすいポイントだったということでしょう。

というわけで、以上の三点がきちんと過不足なく書かれていればA、どれか一点が不十分なものがB、書かれているのは一点だけというものがCでした。Bの答案の大部分が、②が書けていない、政治学の没価値的分析が理解できていない答案でした。Cの答案は、それに加えて語義への言及のない答案の多くです。

ミルズと論争した、とか、バカラック・バラッツの批判を受けた、とか、ここでは関係ありません。そもそもCPS論争の相手はハンターですけどね。そうした様々の記述はそれ自体間違いであっても不実記載として無視しています。漢字の間違いもまた、全く違う概念を想起させるものであれば、ポイントをクリアできていないと判断せざるを得ないのですが(「多数の支配」と書くべきところ「数の支配」と書いたのでは意味が微妙に変わる)、多くは目をつぶっています(「包括性」が「包絡性」というのは、ま、通じなくはないか、という感じで認めました)。Fになった答案は、ポイントすべてについて書けていないと判断せざるを得ないものです。試験の答案というのは、もちろん、深くて厚い知識を背景に自由に論じることを求めるものもあるので(二問目はそういう傾向のもです)、自由に論じていけないわけではありませんが、まずは、何を問われているのか、何が求められているのかをきちんと理解して、最低限のハードルをクリアしてから、自由に論じるところはやってほしいと思います。

二問目への解答者は1名で、A+とまでは行きませんでしたので、1問目への解答者の中からA+答案は選びました。

2回生：■■■■、3回生：■■■、■■■■、4回生：■■■■■ 以上4名。三つのポイントにきちんと答え、余計なことは書かず、文章の通りも良いものが選ばれています。